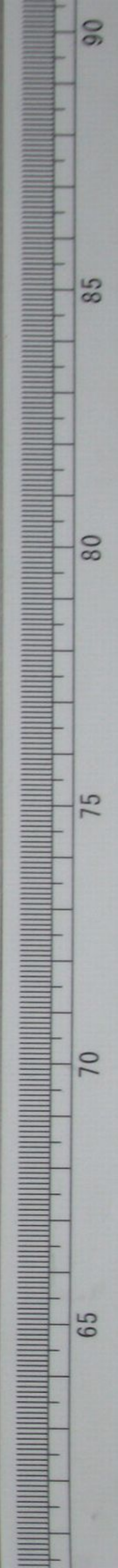


春城執事表別本

54

特別
14
1919
834



44  
1919  
430

45  
1880  
54

834

會所

信之初也

去在氏其秋語 不竹世字人 〇〇

去城五江花  
新而之信

居而 知而 行而 老而 侘而 思而 首而 不而 不而  
 意甘 古事 不厭 進上 樂立 生禮 通禮 進  
 有旅 得 友而 年而 不而 不而 不而 不而 不而  
 音 居 居 居 居 居 居 居 居



昭示十年十一月  
市島謙吉





糸結しその物く時よの事少なりと  
あふはるを候まはるよし美しいの体おりの  
まの端をき候ふ

牛の物風衣の物候まの候まはる  
はよおのりもやあつひの事おのり  
かろく候もあつひの事あつひの事  
うちあつひの事あつひの事あつひの事  
任ふには候まはるよし美しいの  
風衣をき候ふ

山草十草の事候まの候まはるよし美しい

張らるる物く候まはるよし美しい  
ちけよ自惚か候まはるよし美しい  
白らるる物く候まはるよし美しい  
のりて門の物く候まはるよし美しい  
物候まはるよし美しい  
菊池昔文衣の候まはるよし美しい  
あつひの事あつひの事あつひの事  
はつひの事あつひの事あつひの事  
まらるる物く候まはるよし美しい  
まらるる物く候まはるよし美しい  
まらるる物く候まはるよし美しい

おのゝろゝ氏も然る可らざるに空位よりは七  
位より下位をこれに充てしむるに非ざるは  
やむを得ずとありしに、浦中氏は、其の次か  
を以て、後述の如きは、其の事と云ふべし  
然るに、其の如きは、其の事と云ふべし  
好むべきありしに、其の事と云ふべし  
は、其の事と云ふべし、其の事と云ふべし  
ふいは、其の事と云ふべし、其の事と云ふべし  
其の事と云ふべし、其の事と云ふべし  
其の事と云ふべし、其の事と云ふべし  
其の事と云ふべし、其の事と云ふべし

日本画家の發言書

カロッセ博士の美術協会講演

日本美術協会は一昨午後一時より開會、参考會者、  
土方伯、金子、末松西子、牧野文相他方七十名の會員  
午後二時より独逸博士カロッセ氏は独語を以て一場の  
講演を試みしが其大要の如くなりき

本日は尙美術協会に於て、日本美術に關する私の意見  
を述べよとの所招待を受けし、私の大に名譽言は存ず。  
所て所座います、併しなれら残念な事は、私は独逸語の  
他、餘り外國語を話さず、特に日本語は、其も出来ません  
ため、大部分のお方の所了解になり、まゝ独逸語を以て申  
上るゝは實に遺憾を存する所て所座います。

私、當美術展會に於て、日本の美術家諸君が斯く御集會に於つた席上にて、私の意見を演説する事を非常の名譽と致す所ぞ座座いすが、併し私、決して日本美術の識者としてお話し申す心では座座いせん、唯日本美術を好む者としてお話し申したるのみならず、夫れに至つて程度が低く特に日本に於いて以來、益々私の美術上の知識の不完全なる事を曉る次第で、今日何れも日本美術の識者として非ず、唯外國人として日本美術を尊崇する者の意見として、申上らる考へてありますから、希くは其のお積りとしてお聽取を願ふので座座いします。

此席に於きまして、私がお話しを致すと決心いたしました原因は、私は元來非常に日本美術が好きで、それが元で聊か日本美術を

研究しつゝあるのですが、私、始めて日本美術を見ても是を好むに至りかけた、外國に於て僅かに北斎の名が漸く知れた位の時代から始めました。其時代に於て、外國が如何なる眼を以て日本美術を見て居つたかと申せば、唯珍らしいものとして見て居つたのみであります。

尤も千九百年巴里の万国大博覽會に於て日本政府は餘程の苦心を以て、日本の古い美術品を出品せしめられた。是は於ては我々の外人は此古い美術品を依り、始めて日本美術の真相を知る事を得たので、夫れ迄と云ふものは、雪村、元信、探幽、光琳等の名を以て語り、すとも、其真蹟と見るの機會を得ませんでした。然れども巴里の大博覽會に依つて、一般の歐羅巴の美術家が日本の美術に就て従来の考へを全一變致したので座座いします。

彼の雪舟、雪村、信玄、貞定、光琳の如きは、歐洲美術家の~~林~~  
眼よりして、是れを歐羅巴の美術の大家と見て見る事の上、来る事云ふ  
考へを起すなり。此時から起りて、日本美術は非常の高度に程  
度に於て、今日迄進み来たものであるといふ事の世界に知られ渡  
つたのは、千九百年の大博覧會に、日本政府が古美術を出品せ  
られた賜物である。爾來歐羅巴の美術家は、此眼を以て、益々日本  
美術を研究するは、絶えず日本の美術は、益々歐羅巴の美術家  
に認識せられ、是れが為めに、歐洲の美術の上、非常の影響を及  
ぼす事となりませぬ。

彼の又一ボー式の社意匠の如きは、日本美術が歐羅巴に紹介せ  
られ始めた徴候である事は、何人も疑はずの所でありませぬ。

斯くも日本美術が、歐羅巴に紹介せられたのは、其の賞格を博  
の美術家から非常

この為めに、歐洲人の日本美術の許す考へを、一変するに至つた  
事は、決して、徳川の末世よりして、日本の美術に非ずして、日本の古美術に  
あるのであると存します。

日本も徳川の末世よりして、古代美術の精神を失ひ、強んど、庶民  
替の有様となり、現在の美術家が如何なる風で、其の業を継  
つて居るかを申すに、或一部の日本畫家は、確かに自己の標る可き  
方針を間違へて居るが如き考へます。私は日本を考へて、所  
々石上遇を受け、敢て攻撃を敢すと云ふ事、は、亦、度い  
ま、其が、或一部の日本美術家の採らるる方針は、腹筋など申し  
上れば、此人々が日本從來の畫風を捨て、油繪を描かれると  
云ふ事は、間違つた片断の事ではないか。何故夫れが間違つて  
居るかを云ふに、元來日本畫風と歐羅巴の畫風は、其根底



からして互ひに相定ぬるまで片座いまして、是れが理由を聊か  
是より申し上げて見たいと考へます。

「前述の日本美術の神髓と、欧羅巴美術の神髓が根底から相  
容れないと云ふ事を申しにげます。就て、一般美術は漸く描描き  
繪畫に就て、日本の繪畫は欧羅巴の繪畫と根本に於て相違致し  
居るとあります。欧羅巴の繪畫は、外觀に照はれたるものを其儘  
寫すと云ふ目的で、此目的を達するには、油繪具を以てするが適當で  
あります。日本の繪畫は、私の見れば、所が間違つて居るから知れませ  
が、外觀に照はれたるものを其儘に寫すに非ずして、其心即ち精  
神を寫すが日本繪畫の目的であらうと思ひます。

日本の美術家は、此目的を達せが爲めに極柔らかな毛筆と  
用ゐる。形勢は使人の外觀を示し、出来上つた上に其精神を示し、  
すで、学問上から申せば日本繪畫は線の美術であつて、古來日本の  
繪畫は假令ハ繪具を用ゐたりがあつても、此繪具の爲めに線  
を降つたのを見たる事はないのであります。是れは何故かと申すに、日  
本繪畫の目的は外觀を寫すに満足せずして、其精神を描りて  
見せに在るからと片座います。すなはち西洋の画法を以て、日本繪畫  
固有の目的を達する事は出来ないので片座います。

西洋畫の目的は、其外觀を有の儘に寫すのであります。鉛筆或  
木炭を以て始めの形を致し、油繪具を以て是を完成するので此  
方法を以て日本繪畫の目的を達する事は出来ないと同様、日  
本風の柔らかな筆を以て、到底西洋風の繪畫は出来ないので  
日本繪畫と西洋繪畫は根本的其目的を異にすると共に、又  
其描寫の方法を異にして居るのであります。

其目的並に其方法に於て、日本繪画は非常に高尚で、且つ日本  
の趣味に於て居るに係らず、一部の日本美術家が、従来日  
本繪画の目的と方法を捨て、外国繪画の真似を為すものは  
私は甚だ遺憾と、且つ甚だ不得策であらうと考へるの  
所座います。是れは私人の考へるを、歐羅巴人は考へら  
るゝ居るのであります。

其證據より、千九百年の巴里万国大博覧會に於き、  
トロカデルバビリオこの日本美術館には、非常の見物人が日毎に  
群集致し、たが其群集は皆古美術品たる日本繪画の陳列  
所に集まり、非常には賞賛したるに係らず、日本出品の油繪の  
前には見物人が常に寂く、空しく、有様で居座います。是  
等の油繪は非常に拙劣であつたかと言ふに、皆相應に見らるる油

繪を考へた、係りながら是を外国出品の油繪に比較して、優  
等と申す澤山の往かなつたので、一般見物人の注意を惹く事  
が出来なかつたので居座います。

私は日本にあり、日本の古美術品が非常に大切に保存され  
居るのを喜ぶと共に、若い美術家の精神一致せしめ、其方  
針を間違へて居る事を悲しむので居座います。夫れは何故  
かと申すに、一國の美術として二つの目的を併せ達すると云ふ  
事は、到底之を成し得ないから居座います。

油繪今日の存続を以て致し、且つ、極且つ美術として、  
一つ座り得ないと云ふ點が居座います。是れ即ち外觀描寫以  
外に其心即ち精神を寫し出すと云ふ事で、是れを日本の繪画が  
其古画に於て達し居るのである。然るに今の日本の美術家が、

油繪に於ては世界の賞賛を博し、日本繪画に於ては其精神を失はぬ標にするとは、到底望む可らざる事也、是れは正しく一國の美術として、二個の目的を達せんとするのて座座いす、尤るに或一部の美術家が古來より維持榮幸し來りて、外人の賞賛を博する、日本繪画の目的と方法を捨て、歐羅巴の油繪を採らんとすは、日本の美術の爲の遺憾に思ふ所也、座座いす。日本従來の繪画を作るの方法は、繪画たる美術の目的を達する上於て、何等の美をなすのみならず、此も筆を以て絹紙の上に描くの方法は、古來の國民が種々に苦心工夫し、此方法が日本的繪画を描くに一番適當なる者として発見した者であり、是れは國民的の發明であります。日本繪画の描法は日本繪画の五感の一例目標で、假令は自分の

耳が悪いかると、他人の耳と取り換へる事の出来ないと同様、是れは到底不可解の事也、東西の美術は其目的の方法共に古來研究を重ねて、進歩榮達したるに、近來日本の美術家が日本畫を捨て、油繪を採らば、實に遺憾の至算であります。私に決して其人々を其作品を致謝する。とはちやませぬ、其人々も必ず日本の美術界に新意近社傑作を出さうと思ふので、夫れには古來の方法手段では、其目的を達せられず、油繪を研究せられて居るので、其作品も亦相應に見えぬのであります。吾達の通る日本繪画は國民的精神國民的美術でありますから、今の日本美術家の任務は、従來の手段方法に依つて、従來を得た日本繪画を榮達大成せしむる事が必要であらうと考へます。

若し然らば、種々の方法に依りて、種々の目的を達し、而して  
世界の名言を博せんとする事は、到底不可能の事也。今、後  
次羅巴の油繪も益々發達致しませうが、是れは到底毛筆を  
以て描けぬと同く、日本繪具も、油繪具に寫す事は出来  
ないので市座りますから、日本美術家が今これに専心し、意  
國民的藝術の方法手段を研究發達せしむれば、日本画界の  
前途は極めて有望也。既に昔、顯はれて居る様な雪舟、雪  
村、元信、正信、信實、周文、老琳の様な名家が、輩出するは  
必我で市座りますから、是れが手段方法を誤れば、是等  
名家が輩出して、從來發揚し得た日本繪画の光輝を維  
持する事は出来ないであらうと、私共外人すらも、極く東洋  
美術の爲め、日本繪畫の爲め、是れを心配するが所、市座

います。

長三洲曰、吾輩竹田在梅崖半江諸家、生氣逆韻、實  
出清人上、是林々清人名稱、市座

市座曰、近京師之藝村、應興事好、市肆田間之風俗、而徒畢意  
無別心、楷模之法、故其去流漸滯、惡道如、虛雲、吳春、月傑  
岸約、所謂畫中之鄉愿者、直令人見之、欲嘔、後之流弊可知  
也、一掃而能也。

栗山先生曰、池畫畫、晚年故意作怪、以欺人、眩且怪、不能辨  
真偽也、余多識其中、年以前作、今余為知、池畫、向在京、就而  
審定者、曰相踵、烏及東、未猶相追不止、今茲已作、池畫、跋、今皇  
人、又以此帖、需跋、詠、真、草、行、篆、隸、雖然、怪、其、筆、致、善、韻。



御膳泉自石罅噴出為泓溢而墜澗其聲濼每風自  
谷底而起其側蒼翠皆披瀝藪々有聲與泉聲相響應  
清冷逼人又下而西入松林折北行草萊高於人徑又  
絕矣乃右攀一山仰登忽至竇口曰老豁窟巨石礚礚  
側身全四步隘且黑溜滴沾衣不可深入也又聞山中有  
古榭有焉榭身往往點螺貝色帶微紅髒為紅螺榭然今  
已朽腐故不探尋而止山已多奇如化而其曰勇辟崑曰  
老豁窟若紅螺榭其實不甚奇如土俗所傳亦皆怪誕不經  
多可笑者其他則史可以徵文可以記景致可以愛者無一  
不奇案佐々木盛綱子信實稱加治太郎承久之後從  
北條朝時由北陸道入京師時河白家賢據越後加地莊  
賴文山信實擊敗之余以謂賴文山即七葉山家賢七後  
而其亡雖年曆不詳然若其焦栗則六百年前物當時

燒餘之遺糧不容疑焉余聞伯州名和公館趾亦出焉云  
此其不可誣者矣以祠有藤戶之稱萃以為盛綱事余未  
得其說也余每讀柳文叙永州西山之勝未嘗不歎其妙  
今始游是山其勝景殆與柳記符矣故不復述焉唯於深  
林怪石清泉之幽麗奇處總能叙其大都又為盛綱父子  
聊辨之耳噫造化亦有私乎何鍾秀美於是之饒且奇也  
凡天地間物各有主焉若其山川遠近之勝勢與夫雲烟  
杳靄之情景尺寸千里攢蹙於我眼中者雖曰皆我有矣  
可也嚮與長潭松雨屢約此遊未果是日松雨為東道載  
肴酒余夙心於是乎始償矣同遊者邑醫吉田省齋石山  
鈴木二訓導松雨弟某小田島生負擔而從者松雨僕二  
人時明治三十一年七月 日也

遊七葉山七首

松無七葉與名違憶昔山中陷敵圍今日登臨何所見

七葉山

杜鵑花外杜鵑飛一蹙山川氣欲吞六百年前古荒壘

燒餘粒米到今存焦粟粒磴前喬木擁祠堂左右峯岵氣莽蒼土俗于今尚淳朴

有何功德絲盛綱藤戶祠翠滴峽間長碧苔萬松四面鬱崔嵬却憐蕞爾山巔水

曾養寨中人馬來御膳泉巖巖不与土泥齊石上緣何印馬蹄別有天然奇絕處

山吞曠野樹埋谿馬蹄谿滿山松樹碧嵯峨遊徑晝昏榛棘多緣木求魚非異事

朽殘老樹著紅螺紅螺石窟蒙茸隘且低人傳老貉此中栖莫時出沒買奇禍

縛汝不難於縛雞老貉窟始得七葉山淋漓贈長澤松雨

豐岳摩天一段奇佐洲在水又多姿文章不得江山助

氣字可無雲霧披萬里長風吹短髮四圍積翠染吟髭

此遊猶想出蟬聲晚白露蒼烟月出時

江川英龍衣心木綿食限鼓羹鹽菜菲薄人理所不堪談然綽然其羅  
疾就膏四十餘日皮膚不勝痛而不敢用絹布衾褥家人以桑綿補理  
敗褥始改用之居堂不加罽繕戶牖皆糊故紙接客處糊白紙而已如  
蠶席十數年間不改繕隣藩使者至無所座腰扇拂塵而後坐坪升信  
道贈詩曰名族傳家七百春清廉今日一層新不憂滿室塵理膝欲掃  
東洋萬丈塵小女七歲始學書有客贈硯匣君一見曰此爲無用虛飾  
物出策子箱自畫梅花與之曰如此而足  
天保中水野越州爲國老時島井耀盛用事構陷高島秋帆矢部駿河  
又忌井上傳兵衛廉直屢諫已姦回使本庄茂平次暗殺之江川英龍  
始見島井氏語人曰彼一時登高官顯職心不全其終果如其言  
江川英龍每歲季秋巡視管内先移檄各村止修慈家宿屋食膳戒一  
策一羹僚屬從卒稍涉凌暴者令村胥得一告發曰知而不告者有  
罰禁村胥會集飲饌問孝子順孫力田篤行者與物賞譽捕縛博徒帶  
小刀者無賴姦民管內絕蹤博徒稱三島驛曰箱根關踰躋而過



甲州稱為難治。天保中，幕府命英龍與小林藤助管甲州十八萬石。甲民悅，君治政清廉，一意撫循，惡凡一變。凡代官巡行一夜，旅宿耗十五兩，一休憩耗五兩。及君巡視，食饌限菜羹，百事簡易。終後，不中一宿之費。申民連署請長隸，隸山。

英龍天保中襲職為隸山代官。此時文恭公好奢，天下鴻然，專競浮靡。君慨然持節，儉身家以率管內。自近而遠，以及天下，先定規則，衣食居舍，雖省無益虛飾，少有餘贏，則買文武器具，卹姻戚故人，充賞孝子貞婦，義僕奇特者之資，而大小職務委任皆得其人。凡所以為益國補民知無不為，為無不盡心。忘寢食，孜孜厲行，如斯數年，所屬官僚舊弊一洗，質素正直，爭趨君命，隣境皆異之。

江川英龍，母安藤氏。英龍幼時學文武二藝，日夜苦學，專主實踐。母氏勉勵，事斯以遠，大深戒溺愛。十三歲時墮馬傷腕，母氏無少驚色，手塗膏藥，徐諭曰：學武藝固宜有此等事，古人不言乎？三折腕為良醫，英龍平嘗舉此事戒人，流涕曰：余掛微功，厲志節，稍為世所世，母氏之訓也。廿五歲喪母氏，手與所願念珠曰：凡人成大事在忍耐，汝不敢恃天才，事無大小，專主忍耐。我死視念珠如母，繫頸服膺，不得忽此訓。英龍涕泣奉訓，終身不放念珠。死時遺言曰：舍飲不得放念珠。

戊戌首秋渡江漁邨吳令息書而所賜

孤山風景以爲士梅花勝而得春遲

巖上從來無先開者

光緒戊寅秋末

曲園主人築俞樓於山之西麓十月朔樓下紅  
梅一枝大放吾知姑射仙子喜寸人卜隣  
於斯故使疎影暗香早通消息以徵  
主人姑蘇寄居之春杜老也予巡江  
公餘適來湖上見而異之因滌囊中  
瓦管染彩寫照以誌采居閣下

三百本中未有之奇而俞樓猷得也  
貴鑑家其以退省教人者好事  
焉不

南嶽寺二峯樵人雪琴弄識

老彭淡墨寫臞仙不畫紅梅三十年  
特為俞樓助春色燕支多買不論錢  
更感多情馬少游湖嵌八尺細雕鏤  
他年丹斫爭模拓會見人間萬本留

雪琴侍郎久不作紅梅矣特為俞樓作此  
本設色甚妙呈五觀察選太湖石刻之  
從此模拓徧人間矣恐後人忘其為紅  
梅俞越因題此

戊寅歲 退省翁為

曲園先生寫設色梅花本懸於俞  
樓余見其揮灑淋漓孤高拔俗真  
得草堂面目辛巳秋商之 花林  
太史採石太湖鑄而立於樓後庶  
與 兩公之勳業文章並壽焉  
辛巳秋姚州馬駟良謹跋

孤山自昔得春遲 迎歲方開一兩枝  
底事者番芳信早 催他吟筆染胭脂  
名儒名將復名臣 點綴湖山一色新  
金石從茲俱不朽 伏波銅柱並稱珍

孤山梅開最遲 未有花者前年 余徑度  
俞樓小春時樓外忽開紅梅一枝 因請 雪琴  
師寫設色小幀為曲園師壽 今秋馬星任方展  
玩 幅欲

居山字者亦畫法深乃宋氏父子之味今觀此  
卷煙雲吞吐之語山川出處之波苟死骨  
中著筆畫書古畫神至此耶

句曲張雨後

指向山中防隱君行從古湖。法

仙家更在空去升只許人間禮白雲

皇慶二年秋居山之言克恭

<sup>山中</sup>洞暗泉偏冷巖深桂絕香中住能不  
獨淮南王

天南地壯年々如  
惟有萬盧花是故人  
胡鐵梅寫

對溪彩蘆鴈

張嵐溪名筌字芳孫号山水清遠堂始  
名重恕字謹翁号墨稼本姓阿部有故  
改長谷川後脩張氏道學大槻盤溪畫師梅  
慶應元年乙丑閏五月九日死年五十二葬大  
塔院先塋次  
洞居鷺為物候忽已動微涼無限重泉  
解聲海夕陽 丁亥夏口 畫之危拙者寫

題 劉元堂白  
山次立幅

題陸鴻漸真

山陽外史

李白狂歌張旭顛醉鄉無處著游鞭竹爐銅鼎別天地儘著先生作一傑

白祖 飯王體為

西去青宮擗白頭

新筆解揮任梅山福

於朱有法高之

二研園 仿作天地

蒲塘老韻

指子花 五海波美

佛心雲掌

半窗清 影

東籬

巫山 地心仿劉雲湖

芝僊祝壽

倚 斗斛木

北槩概地同 朱儒短小之標也

倚 方形箱

篋 被長箱

丁丑春日宮干 為子孫

松翠蒼蒼 巖巖山法淡一老步蹒跚

扶節相約 彈棋去也 得浮生半日閒

一叢迴抱 三玄深 弄影陰中 半韻庭

長日漫嫌 無似可 好詩三人合 詠無窮

野樹分青 霜 山泉注 碧石 溪 芳

亭人石見 惟有 白雲飛

帆盡 江漢 澹 木 空 山 空 青

管歸 白雲外 重山 石 下 幾 石

新

雲山高五竝  
 雲天高而之  
 其帶以海  
 誰知節不少  
 行車矣者  
 畫以空其  
 筆之空其  
 涼寫不為  
 金馮九烟  
 雨作成因  
 六朝金粉  
 今成夢何  
 似青山遠  
 不磨  
 歸雲雲擁  
 樹失山林  
 古木蒼藤  
 日月昏南  
 望青松如  
 木短聲浩  
 羅立似兒  
 孫  
 南田張古  
 民  
 峨眉高為  
 極情畫層  
 山更出積  
 雪以輕日  
 寒光半空  
 涼冰持一  
 尊悵絕望  
 齊州後  
 忽天風屬  
 冷不可留

題畫梅

翠軒立原萬

不待春風動  
 先開筆下梅  
 暗香清  
 雪月独占  
 百花魁

神爽

三橋居士跋

山長水月四雨

神爽  
 神爽即由  
 夏初在色  
 靜終日不  
 言心素  
 老花狂  
 五  
 首遲轉  
 來喧

題畫

三橋

深山色為  
 清且去不  
 言心素  
 老花狂  
 五  
 首遲轉  
 來喧

白路鳥來  
 何家灘魚  
 石前却人  
 玉起  
 宿務勝  
 如江

梳花歸、柳深、山是春光、碧、歸時、好  
 子、晚來、清、掠去、在、中、一、更、只、討、河、隄  
 二、五、喜、抄、一、生、收、野、史、信、詩、柳、花、水、歌  
 華、銘、小、竹、老、人  
 秦、時、蒙、恬、制、衣、斯、管、城、厥、功、不、朽、勝、彼、長  
 城、  
 茶、湯、嫩、水、輕、花、不、散、辛、小、竹、老、人、書  
 口、甘、神、爽、味、偏、長、  
 柔、暖、滌、風、相、扇、旭、在  
 盃、中、月、亦、看

明汪砢玉論畫

繪事名目

漆 不描彩色 渲 翎毛謂 界 界畫 描 白描  
漆深出 之深渲 屋宇 人物

臨 看真本 模 用印 傳 對面 寫 花果草木  
對臨 榻影 傳對面 禽獸醫士

畫則

白描 水墨 淺絳色 輕籠薄罩  
 五色輕淡 吳裝 大着色

古今描法八等

高古游絲描如曹衣紋 琴絃描如周  
如十方尖筆 琴類

鐵線描如張 行雲流水描  
如厚

馬蝗描和之顧興喬 釘頭亂尾武洞  
類一名蘭葉描

混描多 槲頭描禿筆也馬  
遠夏畫



青衣描 不與

橄欖描 江西類

柳葉描 觀音筆子

戰筆水紋描 唐語大減

柴筆描 唐語大減

斂樹法

松皮如鱗斂 高針有流尾

柳身斂如交叉麻皮斂

梧桐樹身稀二三筆橫斂

楸枝四等

丁香 范

雀爪 郭

火斂 李遵

拖枝 馬

樹葉二十七等

折蘆描 如梁楷畫

柔枝描 筆尖大

竹葉描 筆肥短

減筆 極之類

蚯蚓描

柏皮如繩斂

梅身要點擦橫斂

描葉 石八

墨葉 一等

著色葉 一等

斂石法

麻皮斂 董與國斂

雨點斂 范寬依名

大斧斂 李唐馬

長斧斂 許為一等

泥裏拔釘斂 李唐

彈洞斂

鬼面斂

馬牙勾斂 如李將軍

寫石二十六種

飛白 五色竹 堂上用

盤陀 石名

骨髀 石名

馬牙樹

蚌蛤 石名

漿腦 石名

靈石 青黑色仕女

雲母 石名

石筍 石名

獅子 石名

馬鞍 石名

吐孺 石名

架 石名

山字石 石名

仙座石 石名

臥虎石 石名

鷲子石 石名

蝦蟆 石名

梅 石名

太湖石 石名

惡面 石名

羊肚石 石名

鷹座石 石名

彈高石 石名

坡脚石 石名

勾勒 石名

陸羽

陸羽字鴻漸 一名疾 復州竟陵人 或言有僧得水

瀆畜之既長其師教以旁行書答曰終鮮兄弟

而絕後嗣得為孝乎師怒使牧牛羽潛以竹畫

牛背為字上元初更隱苕溪自稱桑苎翁詔拜

太子文學徙太祝不就職 唐書有傳

唐永定寺陸鴻漸書額 吳地記

宋張洎云唐王維畫孟浩然像有陸文學題記

鮮于樞

鮮于樞字伯機号困學民漁陽人官至太常寺典簿

酒酣驚放吟詩作字奇態橫生善行草趙文敏極

推重之小楷類鍾元常 書史合要

鮮于公早歲學書媿未能如古人偏通野見二人

輓車行淖泥中遂悟書法為大德前游漢集

王庭筠擅名於金傳子澹游至張天錫元初

鮮于樞得之 解結書學傳授

鮮于樞困學書名在當時與趙吳興鄧巴西各推

長一方困學多為草書其書從真行來故篆筆

不苟而点畫所至皆有意味乾翁家藏集

書法故於宋李元興作者有功而以趙吳興鮮于

漢陽為巨擘乎終元之世出入此兩家 陸深儼山集

讀書

畫學高深廣大變化幽微天時人事地理物態無不

備焉古人天資穎悟識見宏遠於書無所不讀於理

無所不通斯得畫中三昧故所著之書字字肯綮皆

成訣要為後人之階梯故學畫者宜先讀之如唐王

右丞山水訣荆浩山水賦宋李成山水訣郭熙山水

訓郭思山水論宣和畫譜名畫記名畫錄圖行字彙

畫苑畫史會要畫法大成不下數十種一皆句讀字

訓朝而夕誦浩浩焉聰明日生筆墨去日雷擊以告

然而未窮甚至也欲識天地鬼神之情狀則不可

不讀欲識山川開闢之時流則書不可不讀欲識鳥

獸草木之在像則詩不可不讀欲識進退周旋之節

彙

文則禮不可不讀欲識列國之風土則隘之險要則  
春秋不可不讀大而一代有代之制度十而一物  
有一物之精微則二十一史諸子百家不可不讀也  
胸中具上下千古之思腕下具縱橫萬里之勢身  
畫外存心畫中澁墨渾其皆成天趣讀書之功焉可  
少哉莊子云知而不學謂之視肉未有不學而不能得  
其微妙者未有不遵古法而自能超越在賢者彼  
懶於讀書而以空疎從事者吾知其不能畫也  
右清唐靜庵雜事發微所記一則

子昂臨右軍十七帖非子昂不能為此書然觀者掩卷知為吳興  
筆也大抵古人書在意不在形優孟效孫林教法耳獻之嘗竊效  
右軍醉筆右軍觀之歎其過醉獻之始愧服以為不可及此其形  
體當極肖似而中不可亂者如此能書者當自知之

右見于懷麓堂集  
學書者師晉王氏乃為善學若近代吳興趙公又其高第第  
子也公於右軍書尤喜臨十七帖此則馬柳之刑曹所藏一日  
持示適客有自錫山來者出本觀之筆畫肥瘦稍異然  
俱出公手無疑客又言吾族人尚藏其一亦真蹟也於一日  
間所聞見者已得三本乃知此帖蓋為公平日書課所習  
精疲力以學書為事業用此終老而完之不免如歐陽子之  
所譏者然汝陽子又謂古人作書初非有意換筆餘興林  
漓揮灑使人驟見敬焉絕徐而空祭之愈無其意夫其書之  
如是豈一舉筆而遂能哉蓋其功已用於平日矣故世傳  
右軍臨池學書池水盡黑因有墨池之名事之有無固不足  
評觀於吳興公足以驗之矣  
見乾翁家藏集此文亦學書士足以為津梁矣故并存

乙卯五月四日

林屋

趙孟頫字子昂，吳興人。宋宗室，世居吳興。少負異才，工書畫，善篆隸，尤長於楷行草。其書畫皆自出新意，不沿襲前人。其畫山水、花鳥、人物，無不精妙。其書法，則以行草為最，其筆力勁健，其神態飄逸。其詩文，亦自具風格。其為人，則清高自守，不與俗流合。其生平，則歷宋、元、明三朝。其死後，其畫作被視為至寶。其書法，亦被視為圭臬。其詩文，亦被視為名作。其為人，亦被視為楷模。其生平，亦被視為傳奇。其死後，其畫作被視為至寶。其書法，亦被視為圭臬。其詩文，亦被視為名作。其為人，亦被視為楷模。其生平，亦被視為傳奇。

# 中山得之山水畫呈賦

先君山陽先生畫山水蕭洒墨少而有千  
 壑萬澗深遠匪沁之趣之題中山得之  
 四字之氣韻生動所罕觀也此幅為  
 後卷之主人歲法法余空之主人其賞之  
 丁卯之歲初冬望日試  
 卷式太平兩字墨  
 於後識

山陽先生之畫以款勝美不可示以論  
 也如此幅一時之佳無法法法法法  
 而為趙者感其貴之休聊談之云

丁亥夏日在丹江

香石田叔

古人筆善之妙詣有偶然會接  
言而成者至其興到筆隨則使  
作者再作之不復可多得矣如此  
山陽先生山水即是也今起先  
生而亦在言心也一笑首肯焉  
且世香秋題于丹江客舍

言志翁之六解

字觀侯

安升息軒額字跋

余先人佐田竹水與安升息軒塩谷宅  
陰二翁交最親善宅陰翁有送竹水翁  
歸藩序文長短三篇及棠牒若干息軒  
翁有竹水北地芥談序及尺牘若干翁  
藏於余鄉里余游歷之次邂逅十田島博愛  
雅兄於后越水原雅兄示息軒翁敏捷清  
廉四字額曰真履如何余曰古今名家之  
筆迹則余不能辨其真履大唯若息軒  
宅陰二翁則余能辨之遂告若以前言且  
曰與也非履世人若有不信之者則舉

此類吾皇世跋以問之於身軀公初在云之  
靈

庚寅山春月吉

南筑 間放樓佐田日美撰

越後國一宮 伊夜彥大明神者 天香語  
山尊鎮座社也 此神 天照大神曾孫而尾  
張連元祖也 天降之始居紀州熊野 高倉  
下命云是也 神武帝征長髓彥時託夢獻靈  
劍神策 帝因是竟統中州特稱 天香  
語山之功故今謂伊夜彥山 辨神劍峯者是  
之謂也 其後 帝命平鎮越州之賊遂住于  
伊夜彥山西米水浦岩下使浦人教魚網塩  
竈業國內大治後又遷櫻井鄉伊夜彥其朝  
在于神劍峰南四世孫 天戶國命賜尾張  
連姓 池心宮御 宇奉 崇神帝之詔建  
神祠于此是神祝戶數 元明帝和銅四年

勅賜神田初定其所領四至之勝揭仁明  
帝即位元年天長十年越州有旱疫輒禱  
伊夜彦神神能致雨救病無不有靈驗也於  
是准名神例承和九年十月始神位同十二年  
正月御遊之節外從五位下尾張連濱主舞  
和風樂長壽樂天皇賞歎賜御衣勅移舞  
樂時年一百十三清和帝貞觀三年八月又賜  
神位載之神明牒為名神大社世增加神位  
天曆 聖代授正一位矣蓋自往昔礊城 瑞  
籬御宇造營於此未嘗退轉矣然歷兵亂稍就  
荒蕪長治也 東照宮命加修覆元祿庚辰再  
得 公命三秋而造營工竣是亦為泰平隆運

之所致也

文化七庚午年冬十一月十五日

東宮侍讀 正四位下行大内記兼文章博士

東宮學士菅原朝臣為顯謹識

赤坂前後賦字々みあ 陸妹る水々中ふ  
山高月小水落石出とつふもわ別み紅鶴  
の群鷄をさ出らるるを—— 深むくし  
みち乃ふに遊歴せしあるわ松乃松  
のもともまゝ忽古の句を却りひ出下  
柳散清水酒れ石更ふ々暮村



駐蹕之碑

明治十一年天皇北巡觀風省俗親訪民瘼九月  
十三日到越後刈羽郡鏡波邨駐蹕山上以覽海  
山之勝明年二月邨民相謀建石以記盛事年之  
後昆嗚呼非聖德詎能如此臣在扈從班因其請  
而記之

明治十二年二月

宮内卿兼侍補正三位勲一等

德大寺實則篆額

宮内大輔兼侍補正五位

杉孫七郎撰文并書

鵬高ら傳家にして俳をまきむ抱一を名おにして  
其俳をまきづる而して其家平生立りの厚かりし  
抱一ある方より初舞をゆるし

魚の北月不穩念山の青みら南 抱一

と詠し其一首しを鵬高に送るしに

初かつを一句も出ぬら味ら南 鵬高

或悔に其らふか吟和せしおきえく漢書さすふら柿と  
うり白とわきしし上に

寄葉にすくぶや何れおの初便りこれいなきおの  
妙句也余これにありひ試れことをつくりし

鵬高老人

房麴のあとわれも雪ばや酒のかん

毫田先生といふ予も此書の中にあれども其の

酒餅の味ありけれい 一兩半一抱一

ころ柿丸われもまははや第一盤

文花もめみ句をばきしい人の知るまらるるが或人の  
茶掛の横幅は巻にあらうて句あり

らんほうもつげや書物のほろこがたり

云保頂につくし古今御家の短冊價格なる

子面白し二三を右に描く

ませむ 西 宗祿 五兩 守武 宗祿

其角 流言 冬三四 書堂 尺徳 百文

らら家支考 言承 許六 去来 北枝 五文

む子 杉風 墨翁 拙人 宗因 五文

鬼野 景文 氏元 秋色 口打 五文 立圃 三文

真林 三打 五文 一茶 五文 抱一 五文

曉亭 五文

題大雅堂遺墨後文 春樵梅辻希聲

池叟書畫其價騰踊真贋相考人多不辨之  
其有落款者虽贋而或以見欺無落款者虽真  
而往々疑之是知書画之多偽而不知落款之難  
信也亦真愚矣哉東山有一畫人自稱學画于池  
故能鑒其真筆多少愚人競趨鑒定無落款者  
乞其鑒印以證焉池叟及五十年其人年五十餘  
意二三歲或五六歲之時從而學之與其事既

也下脱  
夫不知落款  
之難信愚矣  
不知鑒定家  
之難信  
數字

信况其以定乎館生自鑒此數紙不拘無落款又  
乞鑒定家之言却徵數字于余余喜有眼而不雷  
同愚俗故書(古相餘響)

越後米原  
歌湖櫻  
花  
穴居不知  
何人家  
藏此行  
小篆羅  
災去之

今歲新栽百株櫻邊鄉忽變作繁榮  
尊塘浪暖開真面羞蕨風希似擁情  
十般不時侵雪釣老翁終日帶雲耕  
此花當恐多年後歌吹海朝愁外城  
天保丁酉有一好事者植櫻于外城  
堤為高觀予于時有感以賦之

穴居字田氏水原之修驗鎮護寺多矣字院主早經遺野大塊父也  
弟周信能畫二子為家叔翁與年塙友

地名三三三  
十梅呼譽  
神戶  
在勢カニ  
攝津カニ  
武飛  
姓氏稱呼  
東海林  
垂袋  
道祖土  
一口イモ  
設樂シ  
五十子カ  
利母カ

浮々来す勢乃河谷ノ下きりて可  
多りしと云々  
光上部ヨリ言語同断テクダ  
櫻田部新吟吟水たり年  
にヤウリし  
年魚市方  
朝花  
振放見者  
及見  
神酒  
菊花  
鉅鹿  
利光  
鹿伏免

刑部カニ  
東稻カニ  
畢承カニ

手名  
有象

此もあらまふたふまふまふあられの  
我がくれあもふて終るに  
心あふまふふつれは「姑さ」のあれ  
乃知そのまふまふまふ  
全

小春日於里よお目け普清代魂在

依渡ていふ國中平小春代魂在

酒あふてうけあふてし月の影のうきよ

漸る

多子圖

半三き人強態寫

水筆云在播  
一枝

送親聖林

為西園是

越後親聖林從余而學非學道也學文義也親  
氏之道與吾道異端故有攻拒而不容者韓愈  
歐羊修是也亦有容以為類者柳宗元是也亦有信而奉  
之者蘇軾是也吾所以待親氏異於是其人則民  
也業則從事文義也其道則矯性絕世以解脫為  
宗吾所謂賢而過之非不賢而不及之流也且聖  
林神穎敏篤可與論文義吾教之不異生徒親氏  
之道寓於文字猶吾道寓於文字也孔門四科文學居  
下親矣聖人之徒次才且然聖人已沒世無傳道之人  
道而在載藉後之學道也文學為先務文學不通則  
聖道不明聖林從余學文授以文之法既得其大畧

以此讀其家書其亦別有所得予聖林將歸請  
言余言止於此若歸鄉之後一旦翻然感激有志於  
君子中庸之道逃其道而歸我則將以父子君臣  
夫婦昆弟朋友之道告之其言豈止於此哉

文化甲戌八月送

釋聖林

浪華音質序

甲申年折瀨藤一節推乃來過昭宮之

昨日雨今日晴前月十日後月大君欲向百年百年  
如是過孰為辱孰為榮何者福何者禍山中多台  
雲莫教脚一踏

右貴陽池頭壁間語也

蝸角為蟻頭利老天術何巧以若彼矣世昨日語  
死今日一語生暗裏推人人不悟門前每日見人行  
右潭州四道館梁間記云語云是皆警世之  
辭也前貴陽壁間語云苟子之意十

明月清風松影半  
龍影動  
青燈黃卷聲徹夜  
雨聲早寒  
雲江

不冷不暑山水小品  
一池秋水動以色  
影者多  
吾友本石山人有此作  
不冷

景公為不韙澤。棄則為瓦石。中於室。屋  
外。お兼。忠。一。時。到。名。如。不。及。亦。不。知。作  
日。若。何。而。常。言。々。自。其。仁。多。負。尊。尊。以。是。道。亦  
皆。古。也。是。言。々。言。皆。是。之。人。事。亦。皆。是。年  
竟。此。如。此。米

嘉弘甲子春

吉中

酒の位

南溪

お新若。結。一。生。と。係。り。吾。君。た。た。る。事。の。だ。ら  
つ。ら。は。時。を。身。と。抱。す。半。ふ。れ。い。百。葉。の。長。よ  
あ。く。人。の。交。り。た。嫌。ま。れ。た。位。を。と。絶。し。理。を  
お。臨。人。と。ら。る。と。い。ふ。お。志。た。ま。は。り。免。れ。あ。れ  
酒。を。や。ら。う。と。さ。り。み。ま。い。酒。の。目。や。を

茶の位

お新若の昔ささりの字位よりそ毎お昔味茶  
を。も。つ。て。神。の。ま。い。と。さ。を。さ。ま。ま。づ。ま。い。を。此  
も。も。に。海。の。か。た。ま。を。茶。も。す。ま。り。れ。た。目。の。ま。を。さ  
茶。り。う。さ。る。て。ね。む。り。れ。ぬ。れ。ま。し。あ。り。あ。雲。は  
朝。の。烟。茶。の。火。を。ま。む。い。あ。や。め。今。茶。と。い。ふ。人。を  
一。時。の。飯。を。も。清。ら。ん。か。ぬ。あ。さ。ん。茶。茶。お。お。し  
あ。る。ま。う。か。ね。と。能。あ。る。ま。た。お。ま。ら。下。戸。は。立  
た。ら。る。ら。も。あ。し。と。い。し。り。戸。も。い。い。さ。め。た。た。い  
ひ。と。く。さ。り。茶。あり。と。言。は。し。お。ま。ま。茶。あ。ん。免。れ  
る。も。あ。れ。世。の。あ。い。て。守。き。ぬ。や。う。に。清。く。と。茶  
さ。の。あ。つ。た。ら。う。と。よ。め。れ

多た多らたやまふたの浮きもの形

孫子曰欲擊手不擊手退兵敵修我戈予似戰復畏待  
彼方養我之送也而戰而勝

陽春情興夜來多柳影花香月色和一刻千金好風  
景憶天桂楫取金波姑蘇陸岳仙

四顧無到人一念不隔情梅花如有喜香氣入襟清  
香風樓主人

青々水中蒲葉知不出水婦人不下堂行子在萬里  
書韓公詩以為婦人之戒勸善堂主人

松柏清陰合北窓恩深氣深遊仙林一刻價千金  
好夢樓主人

經山玉鑑

歸來憇息青山廬秋風落葉盈前除主人  
睡起月初上獨對閑窓寫道書

出羽北風よをみまのくのうへ通るらるふ山をさそ日くれ  
されん九十九や候をいふ村ふたよりつとてやとるもとあぬ  
よなうりこもいふおれ者のひくくあるまはとまをいやくし  
らなたち出て見らふますよ度なふ老くおのふまを  
着くまをあらうまもやもくまは細細くやむらに月影輝  
れいゝまを照しぬ子羊の糸をたて詠ねのりき  
いふはうましこのおれこはのまをを教むてかくとあ  
むなううしやくくおれををくまをたあそいひつとる

之善也

善者之善也

不戰而屈敵兵善之

善者也

善者也

善者也

東洋即事

青々 陳史前光

怒濤聲 經夜茫々 高麗 琉球 何處 方萬

里 秋風 一痕 月輪 船飛 度大東洋

之桑分詞

道 梳 素 便 太 貴 併 將 不 義 半 文 錢

去海

精者之善也

善者也

不戰而屈敵兵善之

善者也

善者也

善者也

善者也

善者也

善者也

善者也

善者也

事 教 下 有







茶の葉の葉の匂を時を了る公  
茶に味多て若竹の影の掃除成  
野坡  
士朗

茶歌

五五抄

徳人ふた

茶の葉の葉の匂を時を了る公

律の茶の三徳は法

秋成

茶の葉の葉の匂を時を了る公

秋成

茶の葉の葉の匂を時を了る公

法中

茶の葉の葉の匂を時を了る公

長原

茶の葉の葉の匂を時を了る公

法中

ほみろるを乃木のなほ月夜おも宮のねも香の匂ひと

言へ

心持のむをきふるはふぢれとよまのりゆしをみらん  
もよみれんみましくは舞はゆめともくた舞れとら木の摘み  
ちぞあふらねみ跡は木のめくも意の中をさみぬらうさ

源子

ふりゆつめら木のめははやくふつは友をねんれさる

法成

そのあふらねゆのまに座のゆはねすみと月さき入

延誠 大塩氏

月夜のおのささけをまをききとたたるますは葉よのさ

一也 河邊清意

むらたれあまいなるまの人まこれとこまをねんあふん

三原二郎

あふはしき木のめしあふら座のゆはとまにねんあふはま  
おあつらふまをいあふらまはしのまの木のまに人の尺やある

一巻

とま埋れいみうのなある色とも舞けさあのおははるの友

芳林

らあまこれのまのあはれ初音らもあつらうらん地をすれ

五雄

たにれおにむむり覚くたあきとれとむけまのんあするあ

式部

けさきまき陽着たさうとまあむたもりなたらその挿れ

字平

西臨言あまのりい空の宿のいさしきくのまかつかうはれ  
れいたる松の木陰のこむりりこのあまのりたにあらまのそあは  
人こしたあまのりまのあまのりまのりまのりまのりまのりまのり

重胤

字平のこむりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり

午之

山城のまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり

讀徒然草 廣秋浩定

四更山吐月微雪微細弦幽光殊忘却花何必貴  
團圓散花狂風雨客能轉可憐請看有妖嬈  
蝶猶抱殘芳眠  
言告學詩者斯語即妙語  
聞天豈不美申晚勿相損とあるを勝る由感極  
いよりよりあまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり  
のこむりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり  
りこむりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり  
ともわらにやへるの用元玉玉の代の體を月月の團  
圓あるあまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり  
中名沈落の體の幽光をま指るとまのりまのりまのり  
る心まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり

おろの随器ありとうりくこいお祈りおみかひつ  
らずしつかしこおるる及あるところ物論とてい  
れたる祈りたさころいあすすやうくころあまこはらこ  
とあす 菩提寺の住吉神社

名

おろい

おろいとおくと物をとあつたかんのほおれ

せう

成身

おろいとうりかんとおれぬとてはあそ人のまわ

おろい

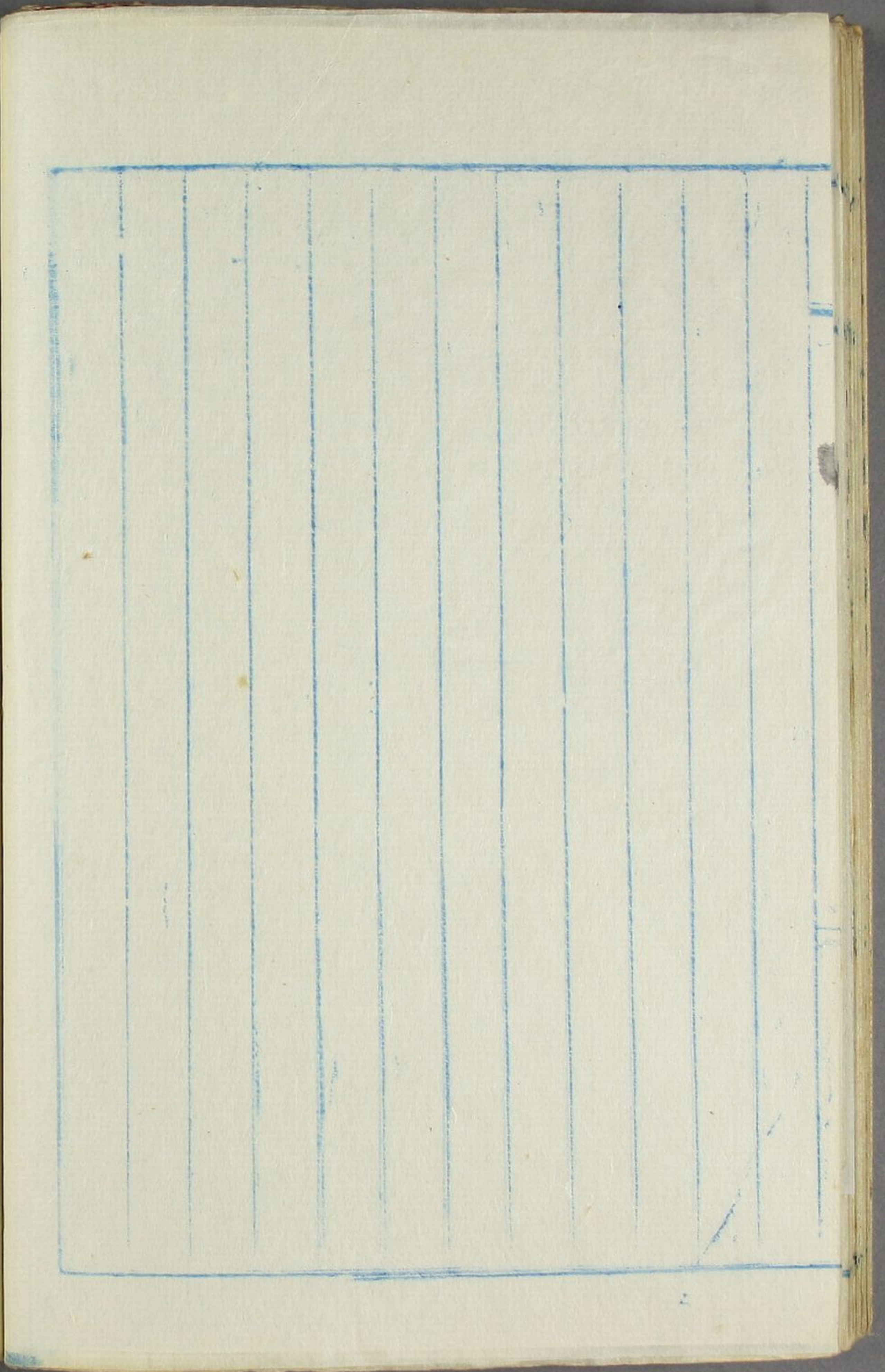
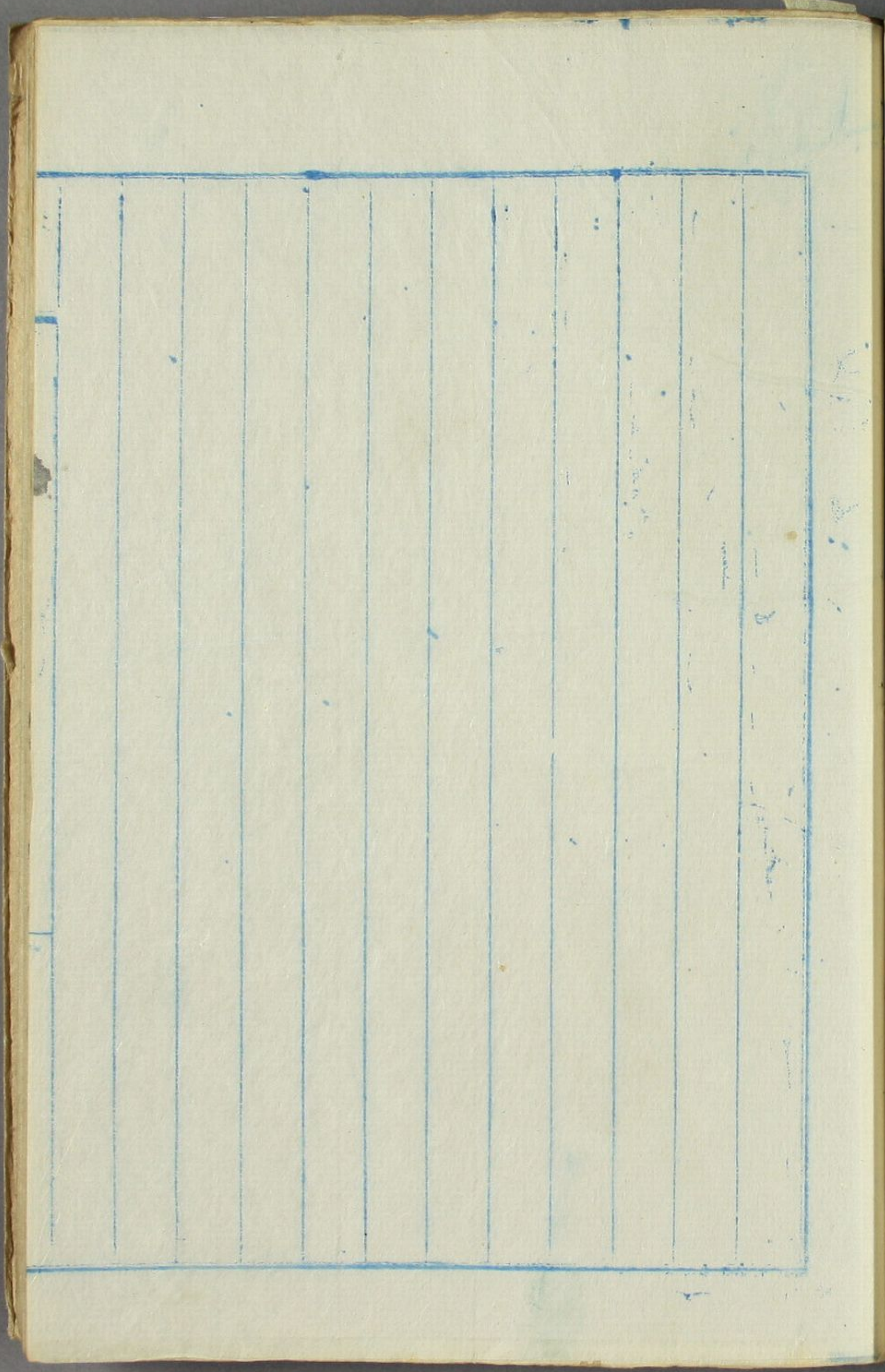
おろいとおれぬとてはあそ人のまわ

おろい

おろい

おろいとおれぬとてはあそ人のまわ

おろいとおれぬとてはあそ人のまわ







人謂泰西之學行孔子之教也衰余謂泰西之學  
 盛孔子之教滋其得資夫泰西之學藝術也孔子之  
 教道德也道德譬則食也藝術譬則菜肉也可  
 以助食氣矣孰謂可以菜肉而損其味耶

象山啓

中江藤村  
 贈答教

○ 俗人比糸社不神いふしんの内ヲ神ト云ハ海行ノ外  
 不子振ル神ノ社多ク月多クヤ多クハ内ノ内ナリハ  
 儀方ハ甲字ト誤テ曹ノコトト云ハ按ル神記曲後上編  
 載甲者執曹鄭注設其大者者厚其小者便也甲  
 鐘也曹說被金也ト云是也甲曹ノ差別分明也或  
 人云史ヲ得甲首トあるト誤ト云是也甲着たら  
 者ノ首ト云ハコトナリト云ハ此ルあるト云ハ  
 岡田耕草卷四  
 三三三

法皇ヲ為儒誤此牙  
 策年纒榻臥清余  
 慈來源又詩世現  
 去去初衣錢ト神  
 直道起窮維振空  
 飾情宜祀縉紳人

南洋君子 都多傑  
不據先王 精新陳

右偶題 一 子

吳東初生 勝齋



結實之華 色澤匪美 成枝之木  
暢茂必遲 右錄拙語 一 齋坦

右抄本折三橋  
認之區眼

中井先生 壽少

中井先生 壽少

半之巨子 乃以年久  
千之巨子 乃以年久

少自山乃好

本年壽

中井先生 壽少

清之去之直徑也

乘素衣高山流水

寺 月 本少之田園再得

極佳翁公看者有一種曠逸

之談如片石落耳自以款勝

此他年所能到也 戊戌之夏 然然公為後

跋南遊日記

自古文人騷客必有山水之遊而遊必有具

筆硯帑墨詩畫文記固其所也然人各異所

好則所記亦殊而具又從而變其南遊日記

者吾 思亭先生遊富岳所經之名勝佳景

而隨覽隨記者也有大觀不可記而止者則

圖焉然亦逆旅同行話苦樂勞逸之暇卒然

所為至里程遠近則多問之田翁茶肆雜

登岳路程亦錄其概畧而已蓋先生之意  
在供他日話柄不欲出示之人故文亦不加  
彫刻焉然是行也尋幽探勝必奇必險不必  
由大路故至<sup>遠</sup>遠岐之要者則具記之不欲遺  
楊朱之憾是則予所從遊而熟悉今讀此  
記益證其然也若夫他日有同好之士欲  
探其名勝則安知不亦為遊具之一指南  
車乎哉

淺野政真謹記

遂隨遊之客甘苦虛日而伴訪

滑徑好山

歎而後思拙子有一牽之牛百

之笑而多筆下 爾

三仗之中各有序之上試前坐茶

一子如月

子相火

華下江山取意成一峯  
一峰生

是元李俊民之句乃以為歌

半江晴

花時西來佳新樹亦佳

試沈表拔新於墨江松濤館

世都道人

步之老世界出花入乃卷

此舍依水探梅之句予乞取承於

山仰之曰二句既云矣三四亦可成

只畫觀之用 半江田園

身年平喜自得十之廿五其詳

後被之者皆歸道

詩更神觀之句全詩已矣

坊用字畫之意  
蜀

海隅之居与鱼雁未忘者之亲  
親於予近况墨江之僑寓

半江

勇船誰泛春潮雨甚標岳山  
是法中

甘於道人田畝父

前峰林下之屋之客亦與葉

里之系也

田畠

誰讀江山深雨之寒上方塔院

卜枯禱

天保唐子三伏

浪系半江田畠之音

右羽權國井氏所藏屏風捲簾類下り改装よりお幅若  
卜者之山崎吉印装捲簾ノ音一浪半江之音也  
此他心算者新法知系危多り元中千岩某氏所藏ナリニ云テ

嘉永癸丑正月二日しふ志あり吟

よふ

少る口此之をふ言乃そまされて

湖向者そあす志席のね

この為畫る和之筆

秋風雁到白川琴頸淺

来或或焦穂新千載須

琴者心尚生来留皮

采河山

物赴山莊為不日盛

往友

沈方老知

鹿野雨方

大海

下七川下於くく片袋  
妹尖の山紅原如きくくむ

常陸之國鹿野二郡界の  
下七川下於くく片袋

衝る探梅亦一奇の味杯

厚伴、來暉音身、以送

下物曉玉是遊人、以送

行妻丹又一日占諸君致探梅

於伊賀月解予回山海先生子

者、東河想仗、梅原、造、信、諸



君之玉叶芳一白先年所唱予方  
孩而牛年一絕亦時一時偶與  
了去月滿海林梅好  
風花西拜按看柏生村短  
多言亦出鄰來

欲從曾月中第斛埃漸行  
漸步出山堆理浮現在此  
若若羅下也予然之梅  
漸自侵沈為事枯子氣亦小  
詩人野只北佳句融去思爭

素情多入夢  
 遠山倩水  
 自見因緣  
 果了  
 年於  
 月深

禮園國年

山入海

其為人  
 堪宜



紙本  
 此卷得松

從其所好不知辭憐尔網  
縲情太癡立見白髮邊  
斃死而已前身或是讀

書兒 物哉 卜一山房主人

離田中清号松溪學人加茂宮本院主  
父義方号養亭有博學之卷

檄搥軒

與手畫竹魚骨直不無  
竹態觀其書法兩非  
竹也瘦而腴柔而拔  
款側而有月準繩折

轉而多行  
吾師幸其吾以之清  
癯雅脫乎書  
行款竹更要行款

書灑有濃澹竹  
更要濃淡書法  
疎密竹更要疎密  
在贈常君固北  
畫京無而以畫之關紐

透入于書燮又以書

之關紐透入于畫又各

兩世畫相視而笑也與

可入谷亦當自以自徐

疾迅火生畫靈

純心瘦筆破筆燥

筆斷筆為之絕不類

升殿後以淡墨水

鉤深而出枝簡葉兩  
非靈積竹之令體在

雨

小院筇堂近郭兩科

頭竟日樹坐尊尊但

才紫上蕭蕭雨定忽

外新栽竹數根燠常

以世題畫而非我詩也

吾師陸種園先生媿

竊此詩而亦非先生之位  
也想前賢負寸寸此未考  
厥姓名名耳特注國於  
以為吾輩日懷業語戒

題小陳

屈宋死章卓州本高平  
繼出陳譜歌在風塵如  
何繁賤送人空頂上  
寧街頭論擔批

山上蘭峯尚曉閉山腰  
乳魚的尚人老胎盡刻  
意散停娉苗何苦東  
鳳婢任媒

乳降九年書於砂

嗟嗟

板橋鄭雙





淳田一蕙系而姓豊臣名可為字士師始在  
分信乎一蕙為半為佛子皆別号也通稱  
内藏允又藏之助京師人田中訥言之徒古學  
ヲ修之格ヲ成不一時東都ニ奉ニ雲田川邊住  
之昔弟精舎ト社ニ淳田系家ノ末孫允云云  
常ニ和歌ヲ好ミ又者家仰ノ音風ヲ喜ボテ  
云々能ハルリ嘉永癸丑米船末ヲ通信ヲ乞フ  
幕府備和ヲ以テ奉ルニ一蕙憤滿心甚ニ當時ニ  
書テ乞フ者ヲ大ニ神風之寇ヲ落ル圖ヲ言ヒ是ニ  
控テヨリ往昔元船ヲ墜レリ今何神助ヲ有ラント

蓋し人ヲシテ攘夷ノ志ヲ激シ動ル平素其志ヲ在  
任テ漢ニ志経ノ國ヲ作リ之ヲ其府ニ献ル第ニ  
門外ニ漢ニ志テ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ  
ケテ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ  
我徒ニ非テ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ  
難ニ處テ誠ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ  
ヤ安政六年十月廿五日發年六十八  
朝廷進志其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ

名ノ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ

其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ

其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ

其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ

かこむ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ  
其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ

其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ  
其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ

其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ  
其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ  
其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ其志ニ

題自畫山水五言

鵬之雨

翠竹林梢紅杏寺。紫雲落落上綠楊。橋  
影半橫安。月影空。一棹溪聲陽水邊。

口 七字

山陽

家在青林紅梅香。無嫌山翠與水明。向  
者儂石貯。結草復水居。唯此一宅心。

識女惜別  
二星何長隔河蓬。今夜相逢散樹對。胸情  
名歡枕下五更鐘。直道未終先洒淚。

紅鏡月下穿針棒九雲月  
紅鏡月下穿針棒九雲月  
紅鏡月下穿針棒九雲月  
紅鏡月下穿針棒九雲月

出此証有保人常遠矣  
出此証有保人常遠矣  
出此証有保人常遠矣  
出此証有保人常遠矣

至正旃蒙作噩夏五為  
通甫作光風轉莖  
至正旃蒙作噩夏五為  
通甫作光風轉莖

穢者老人所花元官直作是業

山之年氏通稱治左樹  
山之年氏通稱治左樹

清太師  
始于涇師為其子世平加先生

名賴俊平蓬毫又古糊  
名賴俊平蓬毫又古糊

加之腰流  
名秀俊

女子  
山后吉  
氏不知終年每

郭吉 是人殺於佐渡

勘助 名俊平

衡平 後醍醐天皇九年甲申法有故為藤田氏  
養子戊辰年戰北

次郎 通稱藤田修理  
名祐吉於山岸村以裝潢為業  
是人當時現在也

平俊 号秋水通稱玄郎  
明治三十二年八月十一日没享年六  
四十九

西村 物 系 系

解良三 吾臣 禱榮重

保素系流之ふいふ之流  
禱源、高入ナリト云フ  
友之 新心

原名壽全 鑄 鑄生 字也

石造士 禎鏡 吾曾山極

禎道人 三神山足也



張心音  
琴漢  
德

王恩美

莽未篡時更定官名及十二州爰罷置  
改易天下多事更造錯刀契刀大錢等  
貨既篡位以劉字印金刀也禁剛印金  
刀之不得行罷錯刀契刀五銖錢等

錯刀

音倉入声塗也謂黃金錯其文曰錯刀

契刀

環大如錢身形如刀長二寸文曰契刀

大錢

徑寸二分重十二銖又曰大錢

印金刀

籀文劉字从卯从金从刀服虔曰正月卯日作長三寸廣一寸或玉或金或



桃著華帶佩之銘其一面云佩以辟

五銖錢武帝所鑄蓋一錢重五銖也

上裏

更作宝貨有金錢龜貝錢布五物六名  
二十八品百姓潰亂宝貨不行乃少錢  
大錢數更變不信盜鑄及私挾五銖錢  
者抵罪於是農商失業食貨俱瘵民至  
涕泣市道後又改貨布貨泉每一易錢

民大陷杞鑄錢法極車鑛頸傳詣長安  
者以十萬數死什六七改易制度政令  
煩多四方囂然謳吟思漢久矣

龜貝 龜如蟲之長貝亦如蟲也生海中如  
車渠肉如料木古者貨貝而室簞布

說見次

二十八品 鑿蹄云錢貨六品銀貨二品龜貨  
四品貝貨五品布貨十品并銀貨  
中又有黃金一品則為六名而有  
二十八品矣

貨泉布泉皆錢也以其布於民間故曰泉故曰泉

大泉十五 新王莽居攝二年所鑄 文化十二年迄千八百

九年

遠岸疎林斜日外春風碧木半竿前  
匡序喚兀居屏障中若有銀河道懸龍

子承家

相加之者殊而於茅之竟為實為  
主之何如也殊之哀乳坤一又是  
子孫三地澤一為朱賊淫賊  
若米有南之安袖一法石則可果而則  
何不揖而相或我若曰何也相只揖  
而已亦可之孫牙熱  
及乃到  
為石之先生  
三勝

抄本御... 爲此... 何... 乃... 蓮...

此本... 信...

僧敲月下門

青霞道人題



新... 林... 全... 名... 日... 月... 也... 也... 也...

